

⑤〇 敷山神社のはじまり

これから話すのは、千二百年以上も昔の話やでの。

天応元年（七八一年）三月九日の夜のことやったそうな。小坂（河和田町）の北の山のてっぺんからふたすじの明るい光がさして、七日七晩かがやきつづけたんやと。

光を見た近くの二十四の村の人たちが、何ごとかとおどろいて、小坂に集まって来た。そして森禪空という人を先頭に山に登っていった。

すると、二人の姿かたちの立派な人がおられた。一人は玉の冠をかぶり、もう一人はそばに控えておられた。禪空が、

「あなたがたはどういうおかたですか。どこからおいでになりましたか。」
と尋ねると、

「我々は天地の神です。人々に作物づくりを教えに、かりに人間の姿になって、ここに降りてきたのです。社を造って我々をまつりなさい。」

と言われた。

「どこへお社を造りましょうか。」

と聞くと、

「そなたの肩に乗って下山しよう。」

と言われた。

大平までくだってくると、

「ここはけがれのない土地だから、ここに社を造りなさい。」

と、禪空の肩からおりられた。

そして稲やいろんな種を下さって、百姓のしかたを教えられた。

また、桑の木の苗と、漆の木の苗をくださると、お姿はふつと消えてしまった。

そこでみんなは相談して、社殿を造って、翌年の三月九日に再び神様をお迎えした。すると、真夜中に紫の雲がたなびいて、神様のおいでになる姿がはっきりとおがめたんやと。

今の敷山神社は、大平から下におろしてたてられたものやでの。